

箱(貨古教信)

〔佛法〕體相法で、其法に種種あつて、滅罪生善、後生善報の爲や、又は饑饉國家、患災延命の爲などに修する。

*せんま ありや舌鼓うつつきなき、せりなまの役は飯炊が何時見覺えて取りなりむ(日本武尊)

〔せんまい〕(額米)の略。神に供へる洗ひ米。神に洗ひ米を供へる役を勤める後家を「せんま後家」というてゐる。

せんまつわけ 御髪の御用なら大銀杏・中銀杏・立かけ・技かけ・干松脂(加増曾枝)

〔干松脂〕男子結髪の名。道甘撰、系瓜草(寛文初年刊)に「枝も葉もせん松わけが膝がらら台體。」

宣命のへん 入鹿…勾欄の角柱

えいやつと引き抜き突立てば、萬戸も飛び下り宣命のへんの大石かろがるとひつきげ(大職彦)

〔へん〕版である。宣命版は長一尺五寸、幅一尺、高さ八寸ばかりの水を造つた箱であつて、公事ある時中務の屋中に置き、宣命使が著座して宣命を讀む場所。江家次第卷三、路歌の條に「中務立標、並置宣命版」。果林子がこの文に「宣命の版の大石」といひ、又官中にあるとしたのも、共に誤つた言ひ方である。

*せんもん 御祝儀申納めて後禪門

仰上げらるる(十二段) 主人石見は禪門の白い頭に黒眼(女腹切)

〔禪門〕禪定の門に入る義であつて、佛道に入つた人の稱。在時刀工が初者になれば多くは法服を着けたものである、よつてこれをも禪門と稱した。

せんらいびく 日益が頂善來比丘と撫で給へば、慧日の影に解けそむる頭の霜の落髮も(聖徳太子)

〔善來比丘〕來人を歡迎する佛者の辭である。比丘は梵語 Bhikkhu である、乞士などと譯す。増一阿含經十五に「諸佛常法、若稱善來比丘、便成沙門、是時世尊告迦葉曰、善來比丘、此法微妙、善修梵行、云云。」

ぜんろ 涕泣眼にあらく涙玉を貫く、思ふぜんろに續して(國性室)

〔善路〕善途に同じ。善根の途。誦曲安宅に「涕泣眼に荒く涙玉を貫く、思ふ善途に續して。」

そ

*そ 抱き力なき草枕投げそ、枕に科も無や(曾枝)

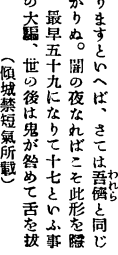
乳人とばし思はれそ、御身が爲の姑と思つて杯頂戴あれ(扇八世)

勸詞助動詞の下に附いて禁止の意(即ち「な」)「勿れ」の意をなす。を示す助辭である。序云「そ」を禁止の意に用ゐた例は、大鏡卷三、大臣師尹の條に「そ風召すべきと申し給ふ」と見え、清少納言の枕草紙卷十にも「今以來けふはと申し給ひそ」と見えてゐる。されば文法上「な」「そ」「な」を禁止の助辭とし、「そ」のみあるは誤であるとの説は餘り酷である。

*そわか お山やら總嫁やら、あつかはづらな晝日中(女腹切) 總嫁のやうな傾城めにみぢ人も心は残らねども(夕霧)

〔總嫁〕江右立者夜發十文色などとも云うた。夜陰路傍に立つて、作り聲で蚊の鳴くやうに呻眼をうたひ、往來人の袖を引いて淫を賣つた私娼の一人で、いと哀れな最下等の女で、貧民階級のどん底生活者である。好色一代女(貞享三年刊)卷之六に夜發の住家を叙して「町はづれ店なしの小家がちな、物の淋しく晝さへ編織の飛ぶ裏貸屋を隠住み」と見えてゐる。總嫁になる女は多くは生活難に苦しむ老女で、白粉を厚く塗付け、暗中に乘じて往來人を騙したのである。好色一代女、卷六に夜發が客に其年齡を問はれたことを叙して「そなたは幾歳ぞと、年紀を問はれし時身にこたへて恥かしく、物辭に作り聲をして十七になりますといへば、さては吾徳と同じ年と嘘しがりぬ。開の夜なればこそ此形を隠しめしめ、最早五十九になりて十七といふ事は四十二の大騙、世の後は鬼が釣めて舌を抜くれも身を過ぐる種なれば許し給へ」と見えてゐる。

〔女〕貞享三年刊)卷之六に夜發の住家を叙して「町はづれ店なしの小家がちな、物の淋しく晝さへ編織の飛ぶ裏貸屋を隠住み」と見えてゐる。總嫁になる女は多くは生活難に苦しむ老女で、白粉を厚く塗付け、暗中に乘じて往來人を騙したのである。好色一代女、卷六に夜發が客に其年齡を問はれたことを叙して「そなたは幾歳ぞと、年紀を問はれし時身にこたへて恥かしく、物辭に作り聲をして十七になりますといへば、さては吾徳と同じ年と嘘しがりぬ。開の夜なればこそ此形を隠しめしめ、最早五十九になりて十七といふ事は四十二の大騙、世の後は鬼が釣めて舌を抜くれも身を過ぐる種なれば許し給へ」と見えてゐる。



傾城禁聲氣所載

〔女〕貞享三年刊)卷之六に夜發の住家を叙して「町はづれ店なしの小家がちな、物の淋しく晝さへ編織の飛ぶ裏貸屋を隠住み」と見えてゐる。總嫁になる女は多くは生活難に苦しむ老女で、白粉を厚く塗付け、暗中に乘じて往來人を騙したのである。好色一代女、卷六に夜發が客に其年齡を問はれたことを叙して「そなたは幾歳ぞと、年紀を問はれし時身にこたへて恥かしく、物辭に作り聲をして十七になりますといへば、さては吾徳と同じ年と嘘しがりぬ。開の夜なればこそ此形を隠しめしめ、最早五十九になりて十七といふ事は四十二の大騙、世の後は鬼が釣めて舌を抜くれも身を過ぐる種なれば許し給へ」と見えてゐる。〔女〕貞享三年刊)卷之六に夜發の住家を叙して「町はづれ店なしの小家がちな、物の淋しく晝さへ編織の飛ぶ裏貸屋を隠住み」と見えてゐる。總嫁になる女は多くは生活難に苦しむ老女で、白粉を厚く塗付け、暗中に乘じて往來人を騙したのである。好色一代女、卷六に夜發が客に其年齡を問はれたことを叙して「そなたは幾歳ぞと、年紀を問はれし時身にこたへて恥かしく、物辭に作り聲をして十七になりますといへば、さては吾徳と同じ年と嘘しがりぬ。開の夜なればこそ此形を隠しめしめ、最早五十九になりて十七といふ事は四十二の大騙、世の後は鬼が釣めて舌を抜くれも身を過ぐる種なれば許し給へ」と見えてゐる。

側酌の納屋の陰からそつと出て、往來の袖をひかへて拾文つに情の切實」と見えてゐる。總嫁の名義に就いては、總發賣屋と總嫁と書くは非であるといへる。按ずるに夜を待つ淫奔を發するから夜發と稱するなら、總嫁の稱も總て招つ男に従つて一夜妻となること云ふ義であらう。「じふもんの條を見よ。」

そろう 世俗に文字誂判じ物など申せども、もと隠語ともそろうことも申し(嵯峨天皇)

〔隱語〕「しうご」といふべきである。隱辭または五に「有委客履辭於朝」とあつて、國語言語に「履者隱也」とある。通鑑五代漢紀紀注に「郭允明以諺辨得、幸帝好與之爲應詞。」

ぞうし「ぞうし」を見よ。

ぞうじやうえん 御身大願を思立ち給ふよし、ぞうじやうえんの功德なり(心五戒魂)

〔増上緣四緣〕因縁・等無間縁・所緣縁・増上縁の四で、他の法を起すに力を與へる縁となるのである。觀經安養分記に「凡夫得生者、莫不持乘阿耨陀佛大願業力爲増上緣也。」

ぞうじやうがまん 本地釋迦如來毘盧遮那遍一切處の御かたち、増上我慢の悪人を驚したる(聖徳太子)

〔増上我慢〕増上慢及び我慢をいひ、共に七慢の一である。我慢とは、自己の力なくして然も己を得た他を凌ぐをいひ、増上慢とは、自己の未だ得ないものをも既に得たかやうにいひゆる慢心を云ふ。

*そろしやばん 侍大將奏者番・堀川波鼓 今日横笛はお奏者番、廣庇に詰めければ(鶯)

〔奏者番〕武家時代にあつた職名で、主君に事

えてみる。但言集覽に「そくふ。顔をゆふ」と見え、漢書註に「顔。手足折裂也」とあれば、あかぎれをも云うたのである。

そごふ 立交りたる女中の傍、そぐはぬ様にも見えざるはさすが童の一徳と(丹波興作) 殿に退かれて此三歳一本立の木に竹や、そぐはぬ連も便りには(松風)

添合ふ義。似合ふ。但言集覽に「そくふは。添合也。鉤ハヌのグハは出クハヌなどのクハに同じ、そひあはざるを云」

そげたつ 頼平そげたつ顔振上げ、なう詠歌の姫玉垂几帳の外見すか、懸なればこそ雪霜の寒い冷たい疲もいとほぬ徒跣(關八州)

「そげはしよげ」その條を見この約説。然たるをいふ。

そこだめ 腹に八月のそこだめも生れぬ前の陸じく(大織冠)

「底溜」懐妊。今如何なる龍宮界底津國へも届かん(大織冠)

「底津國」根の國と云ふも同じ。祝詞六月大祓詞に「根國底之國、氣吹放乎」

底筒男 「かゝこそ和田の云云」を見よ。

そさま そさまを我が手に入れん(爲安福)

「そなたさま」(其方様)の略。

そしぜんぼふ 放下僧は何れの祖師禪法を御傳へ候ぞ(用文章)

「祖師禪法」禪法は釋尊から迦葉に傳はつた。達磨大師が支那に渡つて禪法を弘めたのは梁武帝の時であつて、支那に禪宗の始である。日本にては榮西入宋し、臨朝の後臨濟宗を開

き、また道元入宋し、臨朝して曹洞宗を開いた。黃檗宗は後西院の御時に起つた。されば「放下僧はいづれの祖師の禪法を御傳へ候ぞ」と尋ねたのである。一步を運ぶ祖師や云云を

ぞぞがみ なう磔刑と聞くもぞぞがみ(博多) 盲鳥の網にかゝる如く不覺の死を遂げんかと思へば、ぞぞがみ益の窪つかみたて(三國志)

ぞつと身の毛よだつて恐しく思ふこと。妻心ぞ「その條を見よといひ、更に「ん」の略されたる語であらう。

そそる 御神樂が始まつた、さあ御急ぎとそそれば姫君、ああ待ちや待ちや(蛙合駈) 見るも障るもやれ

お出でとのめきて、そそりに揚屋に入りぬれば(吉野忠信) 逃しは

やらじとすがり止め、女子そそらす悪性鳥、さあま一聲鳴いて聞か(しや(天鼓))

いさましく進む意、そそりぞめく。うかれ騒ぐ。和訓栞に「そそる」俗にいさましく進む意に「へり、源氏にそそかしともそめくともいふ詞是なり」。

そだてる 連立つて參らぬも皆んな様のいとしさゆふ、人にそだてられ賑げられ何ぢやの(女殺)

「言おだて」(煽動)て育成する。助長する。平安城(吉澤拙撰)第一に「早御即位とそだてられ」。

ぞつこん 今宵の雨は身にかかり、ぞつこん徹つてわぢわぢと物悲しう罷り成る(會稽山) 袴腰にしつと

抱付いた其時は春も杵も打忘れ、ぞつこんたへて其嬉し(聖徳太子)

「屬根」眞底。この語現今「ぞつこん惣込んだ」などと用ゐられ、「きつや惣込んだ」「えらう惣込んだ」と同じ意に用ゐる。

そつと 某は長崎者、九右衛門と申してそつとぞいでた唐商賣(博多)

「そつと」(外方)の約。ほかの方。法外。めちや。和訓栞に「そつとは」率法の字庭訓に見えたるは字の誤なるべし、口語にいふは率放にて率爾放埒のつづめ詞にや」とあるはいかに。

そつぼう 割木おつ取つて、てつべ限り腕限り打合ひ技合ひ(酒香童子)

死ぬるも一人死なうかと、そつぼうめつばふ打立つる(博多)

「そつぼう」(外方)の約。ほかの方。法外。めちや。和訓栞に「そつとは」率法の字庭訓に見えたるは字の誤なるべし、口語にいふは率放にて率爾放埒のつづめ詞にや」とあるはいかに。

そてかぐら 座摩の御旅に二十二社拜み納むる袖神樂、少女子ならぬ御子町に(卯月紅葉)

「袖神樂」袖神樂に袖を舞ふこと。卯月紅葉のこの少し前の文に「あをのくに顔に當る日を、袖でかざしの玉造」と云ひたれば「拜み納むる袖神樂」とあやなしたのである。

そてがさ (舞丸)

「袖笠」袖を頭にかけて笠とすること、われはまた賤の男が云云」を見よ。

そてこひ 命の内は袖乞でも、頼みないは後生のこ(大經師)

「袖乞」托鉢僧に袖に鉢を載せて米羹を乞ふを云ひ、轉じて、乞食、物乞。好色一代烏巻一に「往來の人に袖乞して」。

そてざくり 「あはれと思へそてざくり云云を見よ。

袖島源治 袖島源治は新靱ぢやとおしたたるたる、然も藝には骨があるといの(今宮)

寶水の頃京阪の名優であつた。この文は、袖島源治は自元に愛嬌あつて藝が巧者であるとの説である。役者格白三味線寶水五年刊)

若女方之部に「袖島源治。上白上。當二の替りよ。お顔のひかる源治様。お目ものしほ、おつりしした風俗、お巧者さまは皆御存知の君。

袖の下 女中泊りの袖の下、小まんといふ名でほつほつと、鶴のあはれやあさしや(丹波興作)

「袖の下」(袖の下)に物をやりとりすることの意。賄賂をいひ、また内證で物を賣ふこと。丹波興作のこの文は、小萬が泊客から内證に物を乞ひ賣ふことをいうたのである。

そてはし (疵麗)

「袖判」鎌倉室町時代に、公文書に裁可の證として、文書の袖判即ち文書の右に捺し九判または花押。

そてひやうぶ 権三を圍ふ袖屏風(繪襷三)

「袖屏風」袖を以て屏風のやうに顔などを掩ひ隠すこと。

そせし それ我が山に卒塔婆一本遣せし人は五十六億七千萬歳の後彌勒の出世に逢はせ給はん御誓願

などか疑ひ候へき(當年草)

「卒塔婆」梵語にstupa、方墳、圓塚などと譯す。石または木で造り、地水火風空の五輪塔

を云ふ。「こつちを見よ。涅槃經に、「見二卒塔婆、永離三惡道、何況造業者、決定生安樂」。巢林子のことらへる文は、高野山に石塔にあれ日牌にあれ月牌にあれ、建設する理由の一として古來稱せられたもので、弘法大師が金剛の大定に入り、定惠力を以て、五十六億七千萬歳の後彌勒菩薩降世の晩に至るまで、高野山の入法をして退轉なからしめうと誓はれた靈地、他の時時に變遷興亡ある梵刹と異り、大師攝化衆生の大願に、一度此山に參詣する者は再び三途に墮さしめぬとの誓言によるわけである。

***そとはちもんじ** 忘れぬものよ見あかぬ君が、外八文字の道中姿、目付で殺す所體になつむ(喜門松)「外八文字」踏付ける足つきの外輪に八の形なること。「足」の八文字を見よ。

***そとほりひめ** 竹取の翁が拾うた寶娘、衣通姫も跣足で裸で逃げさし(興八州)「衣通姫」日本紀・允恭天皇の條に、「皇后委言、妾弟名弟姫、容貌絶妙無比、其體色微表而見、是以時人號曰衣通姫也」。

***そにん** おのれ少しの慾にめでてよう訴人し居つたな(大難師)「訴人」太平廣記、張實の條に、「案牘分明、訴人不違とあつて、訴へ出る人はいひ、また訴人となつて訴へ出ることをいふ。

園の竹 平家にしげる園の竹、入道相國の御娘、中宮御産のあたり月(女護島)皇族をいひ、竹園の故事に據つたのである。史記世家に「孝王築東苑三百餘里」とある註に「在宋州宋城縣東南十里、俗人言梁孝王竹園」とある。孝王は漢の文帝の子で、いふに居られたので、竹の園を親王のことといふ。

そとはちもんじ—**そめがは**

そばづるのゆみ いざやしら木にそば黒の弓に靱(堀川波鼓)「黒墨」弓は、削つて外皮を外向にた二本の竹の間に木を挟み、これを膠で結合して作り、その竹を漙らないで、木のみ黒く塗つた弓。

そばつづき 立烏帽子にそばつづき、さながら武將の御出立(安夫池)「傍纏」その形小直衣に似たもの、小直衣の襷とは各別である。武家男子曰、衣服部四に、「按、故實袷袢に傍纏彩色等定れる法なし、織物類なり、裾有襷、但小直衣の襷とは各別、其形似小直衣とあり、新野間答に小直衣・袴直衣二物同事に候、直衣に纏ある物に候、俗には傍つづきと申候とありて、二説同じからず、今按するに、三内口決に内内の衣袋烏帽子直衣大臣著之とあれば、故實袷袢の説を得たりとす、傍纏の裁縫寸法深窓秘抄に詳なり」と、和訓栞に「そばつづき。小直衣に似たり小異あり、傍纏と書り、大臣大將の服なり」。

***そばむ** 善次は鳥が心根の恐しければ、格子の蔭身を引そばめて立聞(二夜帳)「側傍へよせらる。平治物語 卷一、光親御釜内の條に「兵どもも大いに恐れ奉り、弓を平め矢をそばめて通し奉る」と、雅言集覽に「そばむ。打向はすしてをわけて居る心なり、心の上にいふはくねる心なり、物の上にいふは筋かひになす心なり」。

***そばゆ** じやれてそばえて手まり取れ取れ(天經師) 小猫のそばゆる如くに疊にいざりつき給ふ(三國志) 虎は勇んで元信の縛を噛切り、背を差向けてそばえた

り(反魂香) ふさける。戯れる。枕草紙に「そばえたることありわらはなどに引取られ泣くをかし」と、とあり「春曙抄にこれをえざればほこりたる心なり」と見えたる。この語は、「そばふ」「そばえる」と訛つても用ひる。

***そばをかふ** やあ怪しからぬ空の雨風、鬼殿そびをかける(振袖始) 誘ひ挑む「そば」は「そびく」「そび」で、「かふ」は「すかふ」その條を見よ(なごり)「かふ」と同じ語で、挑む意。但言集覽に「人をそびくといふは傍擊の義なるべし、又そびをかふとも云へり、搦字の意也と云へり」。

そぶつち 深田のそぶつち顔突込んで、塗るやら搦るやら頬は煉味噲(國性)「汚水たまつて露露のやうに光る土。和訓栞に「そぶ」地をいへり、染斑の義なるべし」。

***そへ** 柳の副前置に寒菊(聖徳太子)「副」立花の法式の名。立花時勢、八に、「立花傳抄之五。副は心かくしの本より物にとらせてしたれたるもの、又はやはらかなる物を可用、心の松のこはは敢て取合よろしきが爲也、右は花形の右の方を守て心をそたてたる物なり、そへはつる物副より長きは不可有」。「しやうじん」の條の書を見よ。

そほふね 照す火影のあけのそほ船(舟)「船船」そほふねの「そほ」は「ほほ」に「船」の「そほ」に同じ、赤塗の船をいふ。萬葉集卷三、雜歌部、高市連黒人船歌八首の中の歌句に「赤のそほ船に漕げ見ゆ」。

***そみんしやうらい** 蘇民將來子孫繁昌、神聖かれと石の華表の二柱、二人の親のいへつとや(烏帽子折)

一つの秘事を傳へんと畔の柳を手折らせ給ひ、これを削り小札となし紅の繩をつけ、蘇民將來の子孫なりと書付け、稚き者の襟につけよ、疫病瘧病痘瘡疥癩一切の惡病を免るべし(振袖始)

「蘇民將來」蘇民將來または「蘇民將來子孫門也」などと書き、疫病を避ける咒語であつて、門戸に貼しまたは稚兒の着物の襟に著つたものである。案内者中川喜三郎、寛文二年刊に「正月十九日、八幡宮神樂小書き木に蘇民將來と書きて小兒の肩に懸くれば、疫病を除くまじないなり、蘇民將來の始めは釋日本紀卷七に備後風土記を引用せる文中に見えて、蘇民將來と結合せる傳説として知られてゐる。按じるとも陰陽道から出たものなるべく、黨業内傳金鳥玉魂集にも「天王、且旦奴婢女、蘇民將來」などの詞見え、また修驗者を「そまくだ」といふもの、蘇民書く札の約であつて、蘇民將來と書いた符札を人に與へるよりの稱だといふ。

そめいひ 我を紺屋の片岡に、何とか思ひ染川は、臺詞に泣いてくれよ(重井筒)

「染川染川重」重成は十に作る。郎兵衛をいふ、寶永頃上座で名高かつた俳優である。熊坂今物語(享保十四年刊)に「片岡仁左衛門存命の折から、あまたある狂言の中に熊坂今物語は……其年其座につらなりし役者は誰誰に……まづ蘇民將來郎兵衛、染川重郎兵衛、杉山勘左衛門、女形には袖崎歌流」と見えたる。染川重郎兵衛が片岡仁左衛門座に勤めたのは、寶永四年冬から寶永五年に亘つて、心中重井筒の作にそれを當込んだ

二〇九

でかくいうたのである。「ななつのしばみ」を
見よ。

***そめく** 櫻橋から中町下りぞめい
たら(天細鳥) そめき姿ののら坊主
(女腹切) 浮れぞめきのあだ淨瑠
璃(天細鳥)

「立止て歩く。沙石集六上に、「當時
のぞめきは、思ふ友をいさなひ此處へわたり
彼處へさしかけ、ざわつきめぐる貌をいふた
入江獅子童舞。幽遠隨筆・卷上に、「若き人な
どの打群れ徘徊するをジメクといふ。萬葉集
に、ますくらは友の跡にながさむる心ぞあら
ん我ぞするしき。跡はさわぐ心かといへり」

そもさん 坐禪の床に本来の面目を
悟る折柄、そもさんがこれ迷の凡
夫、悟つても六十棒(探粉)

「作歴注宋音である。「生」は助辭、「作歴は
何に同じ、禪家に用ゐる語で、支那の俗語で
ある。いかに。いかん。如何せん。雷門録に、
「雷門云、須彌山、作歴生續會」。

***そもじ** 家の名を出すそれのみか、
そもじと縁が切れうか、これが第
一悲しうて(卯月紅雲)

「そなた(其方)の文字詞。文字詞は足利時代
の末頃朝廷式微にして供御の物備らなひ爲
に、女官等その物の名をいふを忌んで何もじ
と云うた體語から起つたと云ふ。

そもと 十六兩ただしられ、それが
ぞもとに嘉平次がうろたへ始め、
命沙汰に及んだ(生玉)

其本(「そ」は其の濁れるもので、萬葉集など
にも用ひられてゐる)の義であらう。根源。
素問靈樞 素問靈樞・十四經(冷泉節)
漢方の醫書である。宋史蘇軾の素問靈樞集註
もあり、清江昆撰の素問靈樞類鈔註(康熙

二十九年刊)もある。

***そや** 無間地獄にまつさかさまに
墮つること三つ(羽)の征矢より早し
(鹽久) 千兩にするは三つ(羽)の征
矢(靈門松)

征矢で征戰に用ゐる矢といふことだと云ひ、
或はまた無矢で當の矢といふことだと云ふも
思ふに無矢の義であらう。但し征戰に用ゐる
矢なること勿論である。千兩にするは三つ(羽)
の征矢」とは、千兩にするは三つ(羽)の征矢の
飛び行くやうに早い意である。

そらす 親御前が殿様の御秘藏のお
蔵をそらし、お氣に違つて浪人
し(水朔日)

「狼を外す義である。蔵は祖を外さぬもの、
それが祖を外すは以て厲の逃げたことに云
ふ。にがす。

***そり** そりを打つておどしても割
符を取らずに置かうか(博多) 人々
驚き反打ち直し、あわてふためき
取廻す(吉野忠信)

「反刃の峰の弧形をなせる所。「そりを打つ」
とは、刀を抜き放さうとして刀の鞘の反をか
へすをいふ。

***そりう** 大和源氏のそりうとかや
龍門殿と名も高く(高岡榮) なあ頼
平、足下は清和のそりう桃親國王
の苗裔(關八州)

師流(「庶子」を「そし」とも云うてある。弱法師
山本九兵衛兼義太夫正本第一に、「御世
圖より先立つてその機香形を」。

「割下」頂を割下げて兩鬢を残したるもの。
そりをうつ 「そりを見よ」。

それしや 何の遠慮もなみあるたる、
内裏女郎に場うてせめ、何れそれ
しやと見えにけり(堀山姥)

「其書」遊女。「それしや」を見よ。猫麗達(淨瑠
璃・元祿頃作)に、「姫君様もせめて一日傾城
になしたるや、……それしやに成らせ給ひ
ぬと世上に沙汰のあるならば。「しや」の條
をも見よ。

それや さすがそれやの女房とて、
世間話に氣をゆるませ(重井簡)

「其書」遊女屋を「それ屋」といひ、遊女を「そ
れ書」または「しや」といふ。

そろ そろを腰から二くすじの、三
馬あざがけ凌ぎつつ(大織冠) つん
ばれあざがけ握りのそろでぞ勝ち
たりけり(大織冠)

「算」算盤の算と同じ語、歌をいふ。大織冠の
このあたりの文は、謡曲海士の文を改作し
たものである。「女房故に捨てん命云云」を
見よ。

そろばんはし 終に見ぬ雲梯、必定
國姓爺めが日本流のそろばん(國性爺)
橋なんどいふものならん(國性爺)

「十露齋」周防國岩國の十露齋橋は延寶年中
に架設され、構造奇巧堅牢、有名なものであ
つたから、これを應用してかく云うたのであ
る。十露齋橋は錦帯橋ともいひ、岩國町の西
北を流れる若國川に架し、其構造河中に石を
疊んで四個の橋脚を築き、之に半月形の五小
橋連續し、支柱なく柱を組んで相照らした
りぬ。橋の裏面に十露齋の連珠に似てあ
る。この橋延寶年間橋主吉川廣藏自ら工夫し
て架設したるものであると云ふ。

***そろべくそろ** どうせうかう焼香
場を候べく候にやつてすて(女腹切)

「候べく候行きなり次第の意に云ふ。用捨
箱中に、「昔は行きなり次第にしておかけとら
ふ事を候べく候にやつておかけといふ者多かり
しが、近年は稀なり、通ひ女の文は其縁故は
知らざるゆゑ、これは昔の女文には候べく
候といふ事多くありて、昔の女子に對して
も讀めし故、それを書くやうにしておかけとい
ふ富なり」。

陳韻 「第一第二の絃は云云」を見よ。

***そん** 産みひろめにし人種の、次第
次第にそんつきて、色の道には發
明な、町の小娘若嫁の(卯月紅雲)

「孫」苗裔または遺傳の意にいふ。貝原好古
編「陳韻」に、「孫」其人の苗裔と云事を其人の
孫と俗にいへり。「孫を繼ぐ」とは血統遺傳
を繼ぎ顯ふにいふ。これと反對に血統を引か
ぬことを「孫外れ」といふ。「おやぞん」をも
見よ。

***ぞんざい** 煙管取る手もぞんざい
(女腹切) さてさてぞんざい千萬
なる奴めかな(出世景清)

「存在」ありの儘の意より轉じて、粗略の意に
いふ。不作法。存在外。和訓栞に「ぞんざい」
俗語なり、粗略の意にいふ、存在のままと云
ふを略したる語なるべし。(感嘆に「存在外」
ぞんざいは誤)とあれども存在外の雙つた語で
はない。

***そんし** 長年は項羽が勇、正行は孫
子が智、母が教は孟母が仁(女腹)

「孫子孫武と云ひ、周時代齊の人で兵法家で

ある吳王固威の將となつて西の方、強楚を破り、北の方、齊魯を成し、名を諸侯に顯した。その著述に孫子十三篇がある。

そんじよ 孫晨が藁屋の紙帳漏りくる風(會稽山) 彼の孫晨が藁一束(天鼓)

そんじよ 孫晨が藁屋の紙帳漏りくる風(會稽山) 彼の孫晨が藁一束(天鼓)

そんじよ 孫晨が藁屋の紙帳漏りくる風(會稽山) 彼の孫晨が藁一束(天鼓)

そんじよ 孫晨が藁屋の紙帳漏りくる風(會稽山) 彼の孫晨が藁一束(天鼓)

そんじよ 孫晨が藁屋の紙帳漏りくる風(會稽山) 彼の孫晨が藁一束(天鼓)

そんじよ 孫晨が藁屋の紙帳漏りくる風(會稽山) 彼の孫晨が藁一束(天鼓)

そんじよ 孫晨が藁屋の紙帳漏りくる風(會稽山) 彼の孫晨が藁一束(天鼓)

そんじよ——だいきやうし

邊」の意にいひ、從つて「そんじよそれ」などといふやうになつたのである。

そんしん 孫晨が藁屋の紙帳漏りくる風(會稽山) 彼の孫晨が藁一束(天鼓)

そんぞ 何と御頭痛の氣味あつて、そんぞと寒氣などはまるらぬか(冷泉節)

そんつぐ 「そんを見よ。」

そんなりや そんなりやおれがかか様といだきつけば(舟渡與作)

ぞんぶり 田をばぞんぶりぞ(女護島)

水の中などに入る時の水音。水中を歩く時の水音。平家女護島のこのあたりの文は、萬歳

た

大一大萬大吉 風折烏帽子・立烏帽

子、大一大萬大吉・白一文字黒一文字(五人兄弟) 大一大萬大吉と我を折烏帽子・立烏帽子(會稽山) 紋所名。

大壽

(觀所鑑武倉録)

だいいうん 魚の中にも鱈などは大うんの物、かれて無用と申した(今宮)

だいえ 柄子の御身に大衣を着し、緋の袂に杵香爐を煙らせ(聖徳太子)

だいかいどうじ 我日の本に昔より住馴れたれば、住吉の大きい童子と申す者(國性爺)

「大海童子」住吉の神の名。頗性野群談(享保二年刊)卷之五に、「我此浦に昔より住馴れたれば、住吉の大海童子と申す者。」

だいがさ 七つ道具の臺笠・立傘。馬印(粟川渡鼓)

だいがしらのみまひ つねづね大頭の舞を好き(反魂香)

だいがま 大鎌の犬めらに懲り果てて死ぬる身を言はば、面而自害とも、心中の外の心中ぞや(卯月潤色)

だいきやうし 梅の曆の根本大經師以春とて袴いらすの長羽織(大經師)

「大經師」現今は表具屋と同義語にいへども、昔は朝廷の御用の工であつて經卷佛畫を裝潢した。その長は新羅の發行權を有し、毎年十一月初めに來年の新曆を弘めたのである。雍州府志(貞享三年刊)土庫門下、服飾部に、